

漱石篇

映画文学人生論

016)吾輩は猫である	夏目漱石	監督：山本嘉次郎
017)坊っちゃん	夏目漱石	監督：前田陽一
018)虞美人草	夏目漱石	監督：溝口健二 中川信夫
019)三四郎	夏目漱石	監督：中川信夫
020)それから	夏目漱石	監督：森田芳光

すべての文学の道は漱石に通ず

人はなんによつて生きるか。男はつらいよ。トンネルを抜けると雪国であった。木曾路はすべて山の中である。故郷は遠きにあると思うもの。兎角に人の世は住みにくい。すべての道はローマに通ず。すべての文学の道は漱石に通ず。

深く考えた結果ではなく、盲目的な衝動かあるいは直感的なひらめきから漱石の『文学論』を読みはじめたのは六年前だが、出口がなかなか見つからない。蒸気河岸の先生やフーテンの寅さんに助っ人を仰ぐ羽目におちいってしまった。あまり頼りにはならないが、溺れる者は藁をもつかむ。

黒船来航後に生まれて、イギリスに留学した夏目漱石は西洋の文明開化が内発的なものであるのに対して、日本の開化は外発的であることに気がつき、「内発」を意識して、自己本位で文学とは何かを考えた。漢学に所謂（いわゆる）文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからず異種類のものたらざるべからず。

漢学に所謂（いわゆる）文学とは、儒学という学問で、その目的は経世済民だ。幕末の儒者山田方谷は、八歳のとき、学問の目的を問われて、終身齐家治国平天下と答えた。八歳の子供でも文学の目的が治国平天下だと思っていたのだ。

漱石は十四歳のとき、山田方谷の弟子三島中州が開いた漢学塾二松学舎で漢学を学んだが、やがて英学塾成立学舎に転じる。



漱石篇

映画文学人生論

そして、三十四歳でロンドンに留学し、英語に所謂文学とは何かを研究する。『文学論』はその研究の成果である。

しかし、『文学論』を精読しても、英語に所謂文学の目的はわからない。漱石が「文学の大目的の那邊に存するかは暫く措く」と、逃げていゝからだ。その代わり、漱石は『文学論』ではもっぱら第二の目的について論じている。

第二の目的とは——幻惑である。如何にして読者を幻惑するか。というと、蒸気河岸の先生の三文小説や寅さんのようなテキ屋の口上のようなだ。幻惑の手段として使われるのは、たとえば恋。古今の文学、ことに西洋の文学の九割は恋の情緒をふくんでいる。特に小説、戯曲の類は恋の分子なしに存在することはほとんど不可能だという。漱石作品五篇にも恋のヒロインが登場する。

吾輩は猫である	三毛	金田富子
坊っちゃん	マドンナ	
虞美人草	藤尾	小夜子
三四郎	美禰子	糸子
それから	三千代	

幻惑という第二の目的のために、漱石は彼女たちの柔らかき恋情の加味を必要と考えた。

文学の大目的の那邊に存するかは暫く措く。

堇程な小さき人に学びたし